よしながふみのマンガに見る＜食＞とジェンダー

Food and Gender in the Manga of Yoshinaga Fumi

Tomoko Aoyama (University of Queensland)

青　山　友　子

"Mythologically, food is men's business; woman takes part in it only as a cook or as a servant."[1]

バルトの言うように、〈食〉は神話的には、つまり、社会一般の言説では、男の世界に属するものであって、女が表立って口出しすべきものではない、とされてきました。女は舞台裏で料理を作ったり、お給仕したり、皿洗い、といった、役割をになわされてきました。そうして作られた食べ物を口にし、また、その味だとか由来などについて蘊蓄を傾け、談義を交わすのは男の特権だったわけです。これはさまざまな時代のさまざまな地域・文化にあてはまります。20世紀の日本においても、しかり、です。

ハレとケ、という概念を使うなら、ほかの多くのことと同様、食に関しても、ハレの領域は男性、ケの世界は女性、と分けられていたというふうに説明できるでしょう。一流レストランのシェフ、食物のかかわる宗教上の大事な儀式など、公の場、非日常的で祝祭的な晴れ舞台の食は男の領域で、日常的な食、毎日の普通の食事の準備は女の仕事、というわけです。また、このケには、元気・気力の気、エネルギー、という意味もあって、日常生活で、食べることによって、活力を養うわけですが、それが疲れたり、足りなくなる、かれてしまうと、ケガレ、となる。そしてその穢れは女性の出産・生理とも関連付けられ、女性が穢れた、汚いもの、晴れ舞台に立つべきではないもの、といった〈神話〉にも結びつくわけです。したがって、女性は、食べることも食について論じることも許されず、メシはどうした、といわれ、おまけに汚い、穢れた存在といわれる、という、まったく理不尽な、失礼しちゃう状況におかれていたといえます。

私が拙著*Reading Food in Modern Japanese Literature*で扱った20世紀の日本文学における食にも、こうしたジェンダーによる食の不平等の例が、いやというほど出てきました。ほんの一部をご紹介しましょう。まず、正岡子規の〈団子事件〉。子規がカリエスでもだえ苦しみながらも、『病床六尺』、『墨汁一滴』などの随筆を書き続けたことはよく知られています。また、そうした公の文ではなく、本来公開を意図されていなかった私的な日録を、『仰臥漫録』として私たちは読むことができるわけですが、そこにこんな一節があります。

> 律ハ理屈ヅメノ女ナリ［略］「団子ガ食ヒタイナ」ト病人ハ連呼スレドモ彼ハソレヲ聞キナガラ何トモ感ゼヌナリ病人ガ食ヒタイトイヘバ若シ同情ノアル者ナラバ直ニ買フテ来テ食ハシムベシ律ニ限ツテソンナコトハ曾テ無シ故ニ若シ食ヒタイト思フトキハ「団子買フテ来イ」ト直接ニ命令セザルベカラズ直接ニ命令スレバ彼ハ決シテ此命令ニ違背スルコトナカルベシ（資料①1902年９月20日）

要するに、団子が食べたかったのに、妹の律は買ってきてくれない。というので、怒っているのです。その翌日、妹に対して、怒りはまだ続いて

いるものの、前日よりは公正な評価が下されます。

> 律ハ強情ナリ人間ニ向ツテ冷淡ナリ〔略〕律ハ看護婦デアルト同時ニオ三ドンナリオ三ドンデアルト同時ニ一家ノ整理役ナリ一家ノ整理役デアルト同時ニ余ノ秘書ナリ書籍ノ出納原稿ノ浄書モ不完全ナガラ為シ居ルナリ而シテ彼ハ看護婦ガ請求スルダケノ看護料ノ十分ノ一ダモ費サザルナリ野菜ニテモ香ノ物ニテモ何ニテモ一品アラバ彼ノ食事ハ了ルナリ肉ヤ肴ヲ買フテ自己ノ食料トナサンナドトハ夢ニモ思ハザルガ如シ一日ニテモ彼ナクバ一家ノ車ハ其運転ヲトメルト同時ニ余ハ殆ド生キテ居ラレザルナリ
> （資料②）

何だ、マンガの話を聞きに来たのに、なんで明治の話なんだ、と、思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、少々お待ちを。この子規の例を取り上げたのは、単に男は食べ、論じ、女は台所の隅で沢庵のしっぽをかじっている、というだけではなく、さらに、それがどのように文となり、読まれているか、ということにも関わってくるからです。

子規が寝たきりの重病人とは思えない大食をして、自分の食べたものを如実にこの『仰臥慢録』に記録していた、ということについては、斎藤茂吉、嵐山光三郎等、いろいろな人がコメントしています。しかし、この妹、律の立場に注目したのは、金井景子氏です。金井氏の指摘したように、律は〈みる〉役割だった。このみる、のなかには、膿だらけの兄の背中を見る、観察する、看病する、世話をする、見取る、判断する、などさまざまな意味が含まれています。しかし、妹に見ることは許され要求されても、食べることと書くことは兄の領域なわけです。そして私たちが今、律について思いをめぐらすことができるのは、子規がまずは怒りに任せて、それからもう少し冷静に、妹のことを書き綴っておいたから、また、さらにいうなら、金井氏がそれを妹の立場から読むという可能性に気づかせてくれたからです。

いいかえれば、食が男の領域であると同様、書くこと、近代文学も長らくそうでした。そこに女性が出てくることがあっても、ジェンダーに関心を持っていないと、なかなかそれに気づいて読み込めない、ということがいえるかと思います。

『食べることの社会学－食・身体・自己』*Food, the Body and the Self* の著者、Deborah Lupton は、フェミニストたちが食に関する〈神話〉の脱構築のために特に力を注いできた点として、次の三つをあげています。

1. 歴史上どれほど女性が食べることを許されなかったか women’s historical deprivation of food
2. 女性が多くの家事に加えて食事の準備もしなければならなかったこと、そしてその結果社会参加が阻まれてきたこと women’s responsibility for food preparation
3. 女らしさの規範に沿うために、女性は食べ物を制限し、食べ物との病的な関係が生じる links between the construction of femininity and the dietary practices of women

すべて近代・現代日本文学、特に女性の書いたものにはっきりと現れています。たとえば、林芙美子『放浪記』では、貧乏暮らしの主人公が、男に食わしてもらうのは味気ない、と言う場面がでてくるし、平林たい子や佐多稲子の小説では、男性とともに非合法活動をしていても、女性だけが食事やお茶を準備することを期待される、また、この三人にも、宮本百合子、円地文子、幸田文などにも、女性の肉体的、知的、精神的、性的、情緒的なひもじい感覚が、繰り返し出てきます。たとえば、幸田文の「食欲」という短編では、病気で入院中の夫が、「金のことなど一ト言も訊かないで」「あの店の何、このうちの何」と、主人公

沙生（すなお）にグルメ料理を「ねだり」ます。

> 沙生はなにも逆らわない。黙って、くたびれたと心のなかへ書いていたし、子供にも食べさせたい、あたしも食べたい、でも子供とあたしは、おいしいもの、いいものをこんなふうなたべかたはしたくないのです、と腹のなかへぎりぎりと書きつけていた。うまいもの屋のうまそうなものを夫に食べさせながら、すさまじく唾液が出てくることがあった。

律と同様、この主人公も、自分は食べず、食べ物の調達をするのですが、少なくとも沙生の場合は、「黙って」「心の中へ」また、「腹の中へ」ではあるけれども、「ぎりぎりと書きつけていた」のです。

この世代で、岡本かの子と森茉莉はおいしいものを描きました。かの子の「食魔」では、魯山人がモデルといわれる、気むづかしい、鼈四郎という料理人が主人公です。彼は料理のレッスンでも贅沢な材料をふんだんに使いますが、生徒である令嬢が、あとで食べるためにとっておこうとすると、その場で捨ててしまいます。「料理だって音楽的のものさ、同じうまみがそう晩までも続くものか、刹那に充実し刹那に消える。そこに料理は最高の芸術だといえる性質があるのだ。」という講釈付きです。まさにハレの食についての講釈です。しかし、うちではこの男は、妻に安い材料しか買わせない。妻が小さな子供に、芋のにっころがしを食べさせているところに、夫が帰ってきて言うことは、「おい、ビール取っといたか、忘れやしまいな。」妻はあわてて子供を負ぶって、買いに行きます。夫は自分の不遇を嘆くのですが、もっと不遇な妻のことは、全然考えないどころか、「なんだって、自分はあんなに好きなおきぬ（というのは令嬢です）と一緒になり、好きな生活のできる富裕な邸宅に住めないのだろう。」なんてことを考えているのですよ。ただ、この勝手な鼈四郎も、ビールを待つ間に「何だ、芋を食ってやがる。貧弱なやつらだ」といいながらも、自分の言いつけどおり、家族が廉いものを食べていることにちょっと満足して、ためしに芋を食べてみます。すると案外おいしいので、「こりゃ、うまいや、馬鹿にしとらい」という感想を持ちます。つまり、この男は自分では認めないけれど、女性の力の世話にもなっているし、その力に敬服せざるを得ないのです。ハレがいばっているけれど、実は心のそこではケに屈服している。かの子のこのジェンダー批判のお手並み、「こりゃ、うまいや」といいたくなりますが、先ほどの正岡子規の例と同様、食を扱った名作という評価はされることがあっても、ジェンダーの観点からはほとんど読み込まれていません。

現代でも、金井美恵子、荻野アンナ、松本侑子、小川洋子、金原ひとみなど、さまざまな作家が、食とジェンダーを意識的に作品に盛り込んでいます。前の世代が、（森茉莉は別ですが）父権制社会で、女性に十分な食物が与えられない、あからさまな不平等・差別に対する抗議、あるいは抗議まで行かないとしても、その不平等を描写したのに対し、現代では関心の中心は、男女、ウチソト、主客、などの二分法への異議申し立て、また、越境、逸脱、という方向へ移ったといえるでしょう。昔、女流文学、というと、一くくりに、ある色眼鏡で見られていましたが、多種多様多彩なものだということが、意識され、ある程度は認められてきたのではないでしょうか。

＊＊＊

この多種多様な女性の文学・芸術、の一環として、女性漫画家の作品も考えるべきだと思います。その中でも特に、よしながふみの食の扱いというのは、大変おもしろい問題・テーマ・表現法を含んでいると思います。いってみれば、シェフ、よしながが、ケの食材を使って、ハレの料理を作

る、また、その逆に、ハレからケを生み出している、そしてその料理がケの枯れそうな読者にも活力を与えてくれる、といえると思うのです。それでは、『西洋骨董洋菓子店』と『きのう何食べた？』という人気のシリーズのなかから、具体例を見ていきましょう。

『西洋骨董洋菓子店』のほうは、イケメンの男性四人がやっているケーキ屋という設定、『きのう何食べた？』は、料理好きのゲイの弁護士と美容師のカップルの日常茶飯、家常茶飯（家メシ、ですね、文字通り）をレシピつきで描く、というものです。どちらのまんがでも、食が大変重要な役割を果たしています。

よしなが流の食というテーマの料理法の特徴は、一言で言うなら、打倒〈神話〉、です。従来当たり前のこととしてまかり通っていた差別的ステレオタイプが、これでもか、これでもか、というぐらい解体されていきます。私が特におもしろいと思ったのは、彼女の描くイケメン料理人たちが、ひところはやった、男の料理や美食哲学のまさに逆をいっているというところです。

壇流クッキング、のダン流は、もちろん壇一雄の名前からつけたものではありますが、ひょっとして、男もすなる、という意味もあったのでしょうか。男の料理のでてくる小説、エッセイ、まんがという系譜があります。また、自分で料理はしないが薀蓄を傾ける、グルメ小説というのもあります。これの代表は古くは谷崎の『美食倶楽部』、下っては、村上龍の料理小説、こういったものによく見られる、ジェンダーステレオタイプが、よしながのマンガでは、さかさまになっているのです。

まず、壇一雄、開高健などの作品や70年代からメディアに氾濫した男の料理というのは、女々しい女の料理と違って、ダイナミックで筋骨たくましい、豪快で冒険的なものだとされています。わたしはこれをThe Cooking Manと呼んだのですが、男は細かなことは気にせず、小さじ１杯とか、３分の１カップとか、中火で何分、なんて言うのは軽蔑し、ひたすら自分の観察と感覚と知性で判断する。また、せせこましい家とか国家に縛られず、世界を放浪する。その際も、形式や様式にこだわらずに、自由に、行く先々で、さまざまな階層の人と交わり、さまざまな味を楽しむ、といったものです。彼らの料理美学には、現代社会の核家族、中産階級の主婦の料理（というステレオタイプ）への嫌悪がみられます。その一環として、たとえば、丸ごと主義、があります。ちまちま細切れや切り身を買わずに、魚一匹丸ごとさばけないでどうする、肉なら塊を料理しろ、という主張ですね。また、キモ偏愛、というのもあります。モツ、ハツ、肝臓、などの内臓を下等なものだと嫌うのはくだらない偏見だ、というだけではなく、肝こそ究極の美味ナリ、という信念信仰です。

Cooking Manの放浪には、大量のお酒と女（つまり、ヘテロセクシュアルな関係）も付き物です。また、広汎な知識、文学の教養、というのも要求されます。（というか、されました。村上龍の料理小説になると、経済力と著名度などのほうが重要な気もします。）ともかく、Cooking Manの男性性には、二重の意味でのオラリティ、すなわち、口でご馳走を食べる、そして薀蓄を傾けたり説教したり物語をしたりする、という言語的要素が必須です。さらに、これはセクシュアリティ、エロティシズムとも結びつく場合が多いのです。また、よく見られるテーマは、味覚は決して平等ではない、ということ、差別を当然だとみなすわけです。そしてこの差別には、ジェンダーに基づくものが入っています。そのもっともあらわなものは、女性を美食の対象として、すなわち、選ばれ、食べられる性、消費される性として扱うものです。そして、美食と美女を求めて、男性たちは競い合うわけです。

さて、やっと、これでよしながふみの話が始められます。まず、現在もまだ連載中の、『きのう何食べた？』ですが、この主人公の筧史郎は、世

界をさすらうかわりに、うちと仕事場である弁護士事務所を往復します。毎日仕事のあとで、晩御飯の材料を買って帰ります。つまりハレではなく、ケの世界です。筧の料理はダイナミックで直感的な男の料理、なんていうのとはまったくちがうし、究極のグルメなどとも違う。ごく普通の安い食材を、ごく普通に、しかし手早く作る、しかも美容師のパートナーと2人で食べるものですから、丸ごと主義を主張することもなく、切り身を買ったり、買い物友達になった、夫婦二人暮しの主婦と、材料を分け合ったりします。スーパーのチラシを見て研究したり、買ったものを無駄にせずに、しかも飽きないように使い切ることを目指す、とか、とにかくちまちましているのですよ！健康や体型を考慮するところも、Cooking Manや美食倶楽部のメンバーとは違います。

Cooking Manの場合には、愛人やらライヴァルを美食によって感嘆させよう、降参させてやろう、という目的もあるのですが、結局最後は一人、孤独、というのが、だいたいおきまりになっています。筧の場合は、日常生活で、料理そのものと食べることを楽しむというのが目的で、料理自体もコミュニケーションの一環と考えることができます。つまり、究極の、絶対的な味覚ではなく、関係性を大事にしているわけです。そして、ケの食ですから、栄養と活力をもたらしてくれるのです。筧にとっては、食材をそろえ、料理すること自体が癒しでもあるのです。（ついでながら、斎藤環氏の新刊書に『関係する女　所有する男』というのがあるそうですが、食において男性は絶対性（究極の美食など）を求めるのに対して、女性は関係性を考慮する、ということを70年代に言ったのが、詩人の牧羊子、開高健夫人でした。）

『きのう何食べた？』は約20ページの各エピソードに、料理のシーンが必ず出てきます。それが、わかりやすい絵入り料理教本の役割も果たしています。[2] 材料は何をどれだけそろえればいいのか、どのぐらいの大きさに切って、何分ゆでればいいのか、何皿かを準備するのに、どれをどういう手順ですればいいのか、同じ食材を無駄なく何回かに分けて使うにはどうすればいいのか、など、非常に実践的なヒントと解説が、提示されます。それに、ごく普通の料理なのですが、どれもおいしそうなのです。おいしそうで役に立つレシピ、というだけではなく、ごく普通の料理が、日常生活に蔓延しているステレオタイプや思い込み、特に、ジェンダーやセクシュアリティにかかわるものを考え直させるような働きもあるのです。

筧は料理・買い物だけではなく、後片付け、掃除、洗濯など日常の家事一般をパートナーと分担して、こなしています。洗濯物をたたんだり、排水溝を詰まらせてパニックしたり、なんていう話は、Cooking Manの小説にはでてきません。この日常性、特に、ちまちまとしているところは、80年代90年代のグルメ・ブームの批判でもあるといえます。筧という名前は、ひょっとして、家計の語呂合わせかもしれません。実際、家計簿をつけているシーンも出てきます。また、「シロさんて…何つーか、お金好きだよね…」というパートナーのコメントや、弁護士なのだから、そんなにけちけちしないでも、収入はいいはずでは、という疑問に、筧はこう答えます。

> 「そりゃ大手の渉外事務所なら確かにじゃんじゃん［稼げる］だけど、死ぬほど働かされて実際の時給はコンビニのバイト並みなんてヤじゃん。それよかそこそこの収入で、人間らしい暮らしの方がいいわけよオレは。それに、金が好きで何が悪いよ？子供に面倒見てもらうなんて未来のないゲイが頼りになんのは金だけだろうが。」

リアルだけれどコミカルなゲイ・カップルの描き方は、従来の少年愛、やおい、BLマンガのイメージとはかなり違います。但し、BLも、非常に多様化しているということなので、このマンガ

が特にユニークというわけではないでしょうけれど。元祖やおいとみなされる、森茉莉の小説では、美少年の相手の美丈夫は、中年でしたが、せいぜい30歳代、このマンガでは、筧は若く見えるけれど、43歳です。パートナーも、筧よりは少し年下だけれど、中年で、決して美少年タイプではありません。なお、実際の年よりずっと若く見える、つまり外見と中身が違う、というのは、よしながのマンガに、繰り返し出てきます。このギャップは、ジェンダーと連携していることがよくあります。

＊＊＊

さて、このマンガは、日常の、ごく普通のケの世界を描いているのですが、そこに、DV（ドメスティック・ヴァイオレンス）、離婚、病気、破産、など、深刻な問題が織り込まれています。そして、必ずどこかひねってあります。また、コミックとシリアスのさじ加減も、絶妙です。たとえば弁護士としての筧が扱うDVのケースでは、暴力を振るうのは小柄でかわいい妻のほうです。それも、すりこぎで殴る、お湯をぶっ掛ける、焼けたフライパンを押し付けるなど、調理器具が凶器と化しています。筧の依頼人は犠牲者である夫のほうなのですが、この夫の、ここまで乱暴されても妻をかばう言動が、DVの犠牲者の典型的なものなのです。つまり、ジェンダーで決まるのではなく、加害者・被害者の行動様式に、ある共通のパターンが見られるということです。一年後、やっと、この離婚の件も片付いたとき、このクライアントは、筧が、「男の癖に、女房に黙って殴られているなんてだらしない」式のことを決して言わなかったことに感謝します。爽快な気分で帰宅した筧は、料理も心置きなく楽しめます。メニュは、秋刀魚の塩焼き、栗ご飯、ほうれん草のゴマ和えに、なめこと三つ葉の味噌汁、買って来たナスときゅうりのぬかづけ。

この、「男の癖に」と言わない、というのは、弁護士として、依頼人に言ってはならない、ということもありますが、筧がジェンダーに対する意識が高い、という証になっているわけです。それは、自分がゲイだから、というのが大きいでしょう。しかし、筧は、実家ではカムアウトしているけれど、仕事場では私的なことは何も言っていないし、両親も、いまひとつ筧のセクシュアリティを理解できていません。また、筧自身、パートナーが仕事場の美容室でカムアウトしているのはいいとしても、お客に自分のことをしゃべられるというのを嫌っています。つまり、決して理想化されたゲイ・カップルとして描かれているのではなく、日常生活でのさまざまな誤解や食い違いが、話に織り込まれているのです。

このように、コミックとシリアスのミックス、どうでもいいようなことと、重要な問題を並べ置く、というのがこのマンガの常套なのですが、それに関連して、登場人物たちの顔の変形についても、注目しておきたいと思います。よしながのマンガでは、同じ人物が、ハンサムなシリアス顔から五角形のホームベース顔にしょっちゅう、場面によってはめまぐるしいくらいに変わります。マンガでは、極端なデフォルメというのは、珍しくもなんともありませんが、よしながのは、かなりしつこく、しかも頻繁に変わるのです。これも、ハレとケが同席している、というか、交換可能だということの現われと考えられると思います。また、デフォルメ以前の顔が、一人一人違っていても、五角形になると美醜・老若・男女ほとんど同じになってしまう、というのが、おかしいとともに、何か、人生哲学的な感じもします。

この、ホームベース顔は『西洋骨董洋菓子店』のほうにも、ふんだんに出てきます。四人のイケメン主人公たちだけでなく、さまざまな脇役まで、姿形だけでなく、性格や態度まで、がらっと変化するのです。つまり、年齢、性別、ジェンダー、外見、職業、教育、社会階層、地位、などで、想

定したり決め付けたりしていると、必ず裏切られる、ということですね。この、期待に相違して、というのは、よしながマンガでは、本当に、執拗に出てきます。あまりによく出てくるので、それがもうパターンになって、読者は驚かなくなるのでは、とも思われますが、それでもやはり驚いてしまうようにできているところが、うまいと思うのです。

『きのう何食べた？』の筧が30代にしか見えないのに43歳、というのに対して、『西洋骨董洋菓子店』の店主橘は43に見えるけれど33歳、軽薄でお気楽そうに見えるけれど、実は子供のころ誘拐されたトラウマでまだ悪夢に悩まされる、ハンサムで、頭もよくて、うちは財閥、法学部でも優秀だったし、営業マンとしても有能、何をやらせてもできてしまう、心配りも細やか、…と、これだけそろっていれば、女性にもてそうだけれど、なぜかガールフレンドはみな去っていく。同様に、パティシエ小野も、若く見えるが実は店主と同級生だった、そして普段内気そうなのに、実は「魔性のゲイ」、すなわち、男を迷わせ、泣かせ、もだえさせるgay fataleで、など、挙げだしたらきりがないくらい、外見や第一印象と実際は大違い、というテーマが繰り返されます。（ただ、テレビドラマ版では、この、マンガでは中心テーマのひとつである、「ゲイ」というのが、抹殺されているそうですが。）

『きのう何食べた？』のほうが、徹底してケの料理だったのに対して、こちらは一見ハレの代表のような、ゴージャスでデリケートな、おフレンチのおケーキ様[3]です。ところが、このマンガでも、ケとケガレが重要な位置を占めているのです。精選され、洗練されたこの店のケーキは、結婚式やクリスマスなど、特別な日だけのものではなく、また、限られた階層、ジェンダー、年齢だけのものでもなく、誰でも買える値段だし、店も遅くまで開いている、ということになっています。さまざまなお客の、日常生活、ケの一部なのです。誰でも買えるし食べられる、といいました。ここにまたジェンダー批判が含まれています。ケーキとか甘い物は、従来女性的な、あるいは女子供の食べ物とされています。しかしこのマンガでは、引退したボクシングのチャンピオンから刑事まで、ジェンダーもセクシュアリティも関係なく、ケーキ好きがでてきます。また、腐女子的な興味でイケメンの店員のいるこのケーキ屋に来る女子学生もいる、という、自己パロディのような場面も入っています。

同時に、ケーキは、小学生誘拐、殺人、という、ケガレの世界にもかかわっています。これが、このマンガに、サスペンスの要素も与えているのですが、きれいでおいしく素敵な世界と暗く恐ろしく暴力的な世界がケーキによってつながっているわけです。このケーキ屋のハレの部分である特殊性、精選された材料、珍しい食材を使っている、という点が、事件の捜査に役立つのです。しかし、この、サスペンス味にしても、決して単純な謎解きではなく、ほかの要素と絡み合った、複雑なものです。ちょうど、天才パティシエ小野や菓子職人見習いのエイジがさまざまな選び抜かれた材料に工夫を凝らして最高のケーキを作り出すように、よしながは、題材をただ集めつなぎ合わせるのではなく、ハレ・ケ・ケガレ、コミック・シリアス、過去・現在・未来を非常にうまく調理、調合していきます。

最初に「神話」やCooking Manのところでいいましたが、食べ物について蘊蓄を傾けるのは、男、という定則がありました。このまんがでは４人の男性主人公たちの中で、弁のたつのは、甘いものは苦手の店主、つまり、法学部出身でもと営業マンで自称女好きだけれどなかなか恋人のできない橘です。しかし、さまざまな女性の登場人物たちも、決して黙ってはいません。それぞれのスタイルで、コメントし、批判し、要求し、表現します。こうした登場人物たちのやり取りが、読者にとって、甘く切ない味わいのものだったり、ピリッと

辛いものだったり、滋養味あふれるものだったりするわけです。たとえば、脇役として登場する一見頭のあまり切れそうでない女子アナが、意気消沈している先輩女子アナに、こう言います。「できる女ができるよーに見えてどこが悪いんですか～～～～～？先パイはとってもチャーミングです～～～～～」

ケの生活は続きます。このマンガの最終巻の最後のシーンは、主人公の、「さて！メシ食って、今日もケーキ売りに行くか！」というつぶやきで終わります。この主人公だけでなく、すべての人にとって、結論でなぞや問題が解決して終わるのではなく、「メシ食って」気を養いながら、「ケーキを売る」、すなわち、自分のメシのタネを求めると同時に、だれかに、あるいはもう少し広く社会に、おいしいものを供給する、そういう毎日を「独り言」という形で呼びかけている、といえるでしょう。

よしながふみは、三浦しをんとの対談で、自分にとってのフェミニズムをこう説明しています。「結婚制度に懐疑的なわけではなく、結婚して夫がとんでもない人だったということがわかったときに、妻がちゃんと逃げ出せる経済力を持てるぐらいの社会にしましょうよ、というのが私のフェミニズムなんです」[4]。このことを、商業メディアで発表するマンガで実践していくために、さまざまな工夫を凝らしています。よしながのまんがは、女子どもや特定のマイノリティグループに対する差別・暴力に、はっきりと異議を唱えているのですが、そのメッセージが伝わりやすいように、やおい・BL・イケメン・ミステリー・グルメガイド・料理レシピなど、すでに商品化されているものを、巧みに変形しながら利用している、しかも口当たりよく消化しやすいように、また栄養のバランスやエネルギーも考えて、というところがまことのプロの味、といえるでしょう。この、マンガに現われたジェンダー批判が、果たして、アニメやテレビドラマでどの程度生かされ、残されているのかは疑問ですが、それはそれで、また別の料理と考えるべきなのかもしれません。

注記

本稿は、University of California, Berkeley, Center for Japanese Studies 開設50周年記念シンポジウム“Japanese Food Culture on the Global Stage”（2009年11月８日）で発表した“Food and Gender in the Manga of Yoshinaga Fumi”をもとに、お茶の水女子大学　大学院教育改革支援プログラム　比較日本学教育研究センター　女性リーダー育成プログラム　平成21年度　第５回公開講演会（2009年12月11日）のために準備した日本語版の講演録である。母校お茶の水で発表する機会を与えてくださった菅聡子先生、また当日雨の中を聞きに来てくださった皆さん、特に「予習」までして、すばらしいコメント・質問を下さったお茶大生の皆さんに感謝の意を表したい。なお、講演の際は、パワーポイントで、よしながふみのまんがからいくつかの場面を紹介したが、ここでは割愛する。

参考文献・資料

正岡子規『仰臥漫録』（岩波文庫他所収）①1902年９月20日付　②同９月21日

金井景子『真夜中の彼女たち－書く女の近代』筑摩書房1995年

Aoyama, Tomoko. *Reading Food in Modern Japanese Literature*, Honolulu: University of Hawaii Press, 2008.

_____. “The Cooking Man in Modern Japanese Literature”, in Kam Louie and Morris Low eds, *Asian Masculinities: The Meaning and Practice of Manhood in China and Japan*, London and New York: RoutledgeCurzon, 2003.

Barthes, Roland. *The Rustle of Language*, trans. Richard Howard, Oxford: Basil Blackwell, 1986.

Lupton, Deborah. *Food, the Body and the Self*, London: Sage Publications, 1996.

岡本かの子「食魔」（講談社文芸文庫（同題）他所収）④・⑤（青空文庫）

幸田文「食欲」（講談社文庫『台所のおと』他所収）③

よしながふみ『西洋骨董洋菓子店』新書館
______『きのう何食べた？』講談社
______『よしながふみ対談集　あのひととここだけのおしゃべり』太田出版2007年
______『愛がなくても喰ってゆけます』太田出版2005年

注

1　Aoyama, *Reading Food in Modern Japanese Literature*, p. 173, quoting Barthes " Reading Brillat-Savarin," in *The Rustle of Language*, p. 253.

2　講演の際、質問者の一人から、この懇切丁寧に思われる図解入りレシピでも、手順がよくわからない、というブログのコメントがあったことが指摘された。「わかりやすさ」の基準も一定ではないことの、おもしろい例といえる。

3　「おケーキさまさま」とは、登場人物の一人が、小野のケーキをはじめて食べたときに、これまでに食べたケーキとまったく違うおいしさに感動して使った表現。

4　『よしながふみ対談集』p. 168.